慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私立学校の学童集団疎開 : 慶應義塾幼稚舎疎開学園を事例として
Sub Title	
Author	柄越, 祥子(Tsukakoshi, Sachiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008.) ,p.130- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成19年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上，現在観察されている限りにおいて (6) の一般化が類型論的に正しいことを見てきた。この一般化が偶然の結果でないとすると，人間の言語知識の反映として説明される必要がある。1 節で ATB 構文と寄生空所構文の関連付け方についての 2 つのアプローチを見たが，ここでの知見は，多重空所構文の統一的な捉え方としては，寄生空所構文を ATB 構文の特別な場合として導くアプローチを正しいものとして支持することになる。

参考文献

Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Cinque, G. 1990. *Types of A'-Dependencies*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Citko, B. 2005. On the Nature of Merge: External Merge, Internal Merge, and Parallel Merge. *Linguistic Inquiry*, **36**, 475–496.

Engdahl, E. 1983. Parasitic Gaps. *Linguistics and Philosophy*, **6**, 5–34.

Hornstein, N. and J. Nunes. 2002. On Asymmetries between Parasitic Gap and Across-the-Board Construction. *Syntax*, **5**, 26–54.

Kathol, A. 2001. On the Nonexistence of True Parasitic Gaps in Standard German. In P. W. Culicover and P. M. Postal (eds.), *Parasitic Gaps*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Nunes, J. 2004. *Linearization of Chains and Sideward Movement*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Postal, P. 1994. Parasitic and Pseudo-Parasitic Gaps. *Linguistic Inquiry*, **30**, 159–186.

Sabel, J. 2000. The Typology of *Wh*-Questions. In U. Lutz, G. Muller, and A. von Stechow (eds.), *Wh-Scope Marking*, Amsterdam: John Benjamins.

Williams, E. 1977.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻

私立学校の学童集団疎開

——慶應義塾幼稚舎疎開学園を事例として——

柄　越　祥　子*

1. 研究目的

本研究は，私立小学校の学童集団疎開の経緯を通して戦時下の私立学校の実態，ひいては戦時下教育の在り様を明らかにしようと試みるものである。学童集団疎開史の本格的な研究は 1983 年の逸見勝亮の研究を嚆矢とし，90 年代にかけて蓄積がなされ，近年では受け入れ側の研究も進んでいるが，そのほとんどは公立の国民学校を素材としたものである。昭和 16 (1941) 年「国民学校令」において「認定学校」とされた，いわゆる私立小学校も，一般の国民学校とほぼ同じ時期に似たような条件で集団疎開を実施させられている。しばしば指摘されるように，国民学校でさえ，疎開は「地域・学校によって落差が大きい」とされるが，それ以上にひとくくりにはできない私立学校の疎開状況は，いまだ各学校史の域を出ていない。各学校に残された史料を，行政史料や受け入れ地の史料と組み合わせながら，疎開の実態をより客観性を持って明らかにするとともに，似た状況の私立学校や一般国民学校などとの比較に

よって，各私立学校固有の疎開経験を，戦時期の教育史の中に位置づけていく必要があるのではないだろうか。戦時下の国民統合のあり方や，教育上の経済的社会的格差の問題を考える上で，少数派であっても，このような特殊な疎開の実態を明らかにし，その固有性を析出することには意味があるのではないかと考える。

2. 研究概要

本研究では，私立学校の学童集団疎開史の一つとして，一私立小学校である慶應義塾幼稚舎を取り上げた。幼稚舎はその所在区である渋谷区の指示に従って，他の渋谷区の公立の国民学校とともに疎開を行っている。幼稚舎疎開学園は昭和19(1944)年8月25日に東京を出発してから，昭和20年6月39日に青森県西津軽郡木造町へ再疎開に出発するまでの間，静岡県田方郡修善寺町に置かれていた。当初は3年生以上の345名（8月24日の統計）の児童が教職員，寮母，傭員などとともに，三つの旅館に分かれて集団生活を行った。

この疎開学園の責任者を務めたのが，当時の幼稚舎主任・清岡暎一である。「生来病弱で且つ徹底的な平和愛好者」と言われる清岡暎一にとって，この時代の主任を務めること，更に疎開学園という校外での特殊な学校運営を行うことが非常に困難であったことは想像に難くない。こうした彼を支えたのが，幼稚舎の教職員たちであり，彼を主任にと要望した小泉信三塾長であり，また，疎開学園にあっては保護者たちからなる後援会であったのではないかと考える。今回は，この後援会の発足過程や実際の活動を通して，私立においては非常に重要であると思われる保護者の動向を，その組織的活動を通して明らかにした。

従来，縁故疎開を中心に推し進めてきた都の方針は，昭和19年6月30日閣議決定の「学童疎開促進要綱」と，続く7月10日防空総本部決定の「帝都学童集団疎開細目」以降，急速に変化し，学童集団疎開が具体化していった。それに伴って，一時は「（縁故）疎開のため幼稚舎が自然消滅するも辞せず」という覚悟までした幼稚舎も，慌しく集団疎開実施に向けての準備に追われることとなった。その過程で保護者による緊急対策後援会も組織され，経済的援助，各方面への連絡，物資の収集輸送など，教務を除く幅広い分野を担うことが期待されていた。実際に，修善寺での疎開が行われてからは，後援会組織はより強化され，金銭，物資面の支援で当初の想定よりも大きな役割を果たすこととなった。また，疎開先の旅館との契約をまとめるなど，保護者たちの実業家としての交渉手腕が発揮される場面も少なくなかった。

幼稚舎は，当局の指示により，1945年6月，修善寺から，青森県木造に再疎開をしている。しかし，再疎開後の青森では，戦局の悪化に伴う東京での状況の変化や，東京と青森の距離の問題もあり，修善寺で見られたような保護者の組織の活発な動きは見て取れない。その分，教員の負担も大きくなり，受け入れ地域の人々に支えられるところも大きかった。

まとめと今後の展望

修善寺での疎開学園経営に関して，今回利用した史料は，慶應義塾福沢センターに所蔵されている，清岡暎一旧蔵史料がその主たるものである。清岡が体調不良のために，主任としての仕事を休んだ昭和19年の暮れ以降，ここで使用したような細かな史料については，現在のところ発見できていない。このような時期的な制約に加え，今回使用した史料は，あくまで教員，それも現場が主でない主任という特

殊な立場の目線が中心になっており，相当に史料に偏りがあることは否めない。しかしその立場であるが故に後援会委員との直接の接触の機会も多く，幼稚舎の後援会がどのような活動を行っていたのかが，いくらか具体性を帯びて見えてきたのではないかと考える。一方で，今年度は，疎開経験者や青森の受入寺院の関係者にインタビューする機会も得た。更なる史料の発掘とともに，こうしたオーラルヒストリーを現存する史料類と関連付けて，疎開学園の全体像を構築することが今後の課題である。

また，受け入れ側とされる修善寺の旅館組合や，青森県の寺院の背後にある仏教界の状況など，疎開を取り巻く時代背景を，深めていく必要もあると考える。特に，疎開事業自体，どういった指示系統で決定が下され，細部の決定権は誰か持っていたのか，公立に比べて私立の選択の自由はどの程度許されたのかなど，根本的な問題はいまだ解明されていない。疎開事業全体の準備不足がたびたび指摘されているとおり，これらの問題は行政側も一貫していなかったことが想像され，それ故に個別事例を積み重ねていくことが必要となっていくのであろう。

当時の私立学校は，国民統合の教育政策の中で，文部大臣から私立学校廃止論が出されるほどに危機的な状況にあった。東京の私立学校の校長たちは団結して文部省と折衝を重ね，廃止という事態は回避したものの，その後私立学校はさまざまな点で冷遇を受けることとなる。戦時下の統制経済による配給制からは除外され，学用品などの入手も困難となった。戦時下に廃校に追込まれた私立小学校も少なくない。こうした状況に対し，各私立小学校の校長たちは 1941 年に日本私立小学校連合会を結成して団結を強めた。幼稚舎主任の清岡暎一も，清明学園の濱野重郎をはじめとする私立学校との交流が見られるが，こうした，私立学校の置かれた状況，また私立学校同士のかかわりが，集団疎開にどのような影響を与えたのかを明らかにすることも今後の課題としたい。

主要参考文献

逸見勝亮，1998『学童集団疎開史―子どもたちの戦闘配置』大月書店
青木哲夫，1994「疎開させる側の論理―集団学童疎開推進政策イデオロギーの構造分析」『生活と文化』8 号，豊島区郷土資料館編
豊島区郷土資料館編，1988『子どもたちの出征―豊島の学童疎開・2』豊島区教育委員会
慶応義塾幼稚舎編，1965『稿本慶応義塾幼稚舎史』明文社
日本私立小学校連合会，1992『日本私立小学校連合会―結成 50 年のあゆみ』

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

日本の習俗における教育的営みとその教育的意義の考察

――柳田国男による近世から近代への視座を手がかりに――

渡　部　恭　子*

本研究の目的

本研究では，日本の習俗における教育的営みを描出し，現代の教育を捉え直す手がかりを得ることを目指す。その過程として，柳田国男 (1875～1962) による習俗研究に着目し，文字を用いて遺されること